

令和元年5月24日現在

機関番号：37111

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K02156

研究課題名(和文)17世紀ローマ美術における美術通(Intendenti)と庶民(Volgo)

研究課題名(英文)Conoisseurs and ordinary people in Seventeenth Century Roman Art Scene

研究代表者

浦上 雅司(Urakami, Masashi)

福岡大学・人文学部・教授

研究者番号：60185080

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)： 対抗宗教改革後のローマでは聖堂に多数の祭壇画が描かれたが、庶民も多くこれらの作品を鑑賞しに訪れた。17世紀のローマでは室内に絵画が飾られることも普及し、絵画は庶民にとっても身近な芸術となっていたのである。

本研究では17世紀初頭のローマ庶民が教会に飾られる聖画像をどのように受容したか、また画家たちはこの新しい状況にどのように対処したか、様々な角度から考察し、画家ドメニキーノの事例に見られるように、この時期のローマ絵画評価には庶民の関与を考慮することが必要不可欠であることを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の最大の成果は、17世紀ローマ美術界で、庶民も積極的に芸術として絵画を評価するようになっていたということ、具体的事例に即して検証したことにある。従来、聖堂を訪れて祭壇画を見る庶民は、単に描かれた聖画像をそのままに受け入れるだけであったと考えられていたが、本研究によって、バロック時代の庶民と芸術の関係に関する長い間検討されることもなかった固定観念に一席を都怖じることができた。

研究成果の概要(英文)： After the Counter-Reformation, Roman churches were decorated with many new altarpieces, and ordinary people came to appreciate them. In seventeenth century Rome, painting as decoration was popular even among not-so-rich people, so they became familiar with this art more than ever. They not only adored but also enjoyed sacred paintings.

In this research, I considered from various points of view how ordinary people of seventeenth century Rome saw new sacred images exposed in churches, and how painters accommodated tastes and needs of this new 'client'. On the research focused mainly on the works of Domenichino, I concluded that it is indispensable to take into consideration active role of roman ordinary people to evaluate properly sacred paintings made in this period for Roman churches.

研究分野：西洋美術史

キーワード：庶民と絵画 バロック期の聖画像 庶民と聖画像 17世紀ローマ美術理論 ドメニキーノ 詩人マリノと模倣論

1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究代表者は、以前から17世紀ローマ美術界の有様に注目し、対抗宗教改革によって美術と社会との関係が従来とは違った形で規定されるようになったこの時代における宗教美術を受容美学の立場から考察することを続けてきた。当初、研究の具体的な内容となったのは、17世紀初頭のローマにおいて描かれた聖画像、特に教会に描かれた祭壇画や礼拝堂装飾が同時代の人びとにどのように受容されたのか、同時代の文献と照らし合わせて解明することだった。

(2) 同時代の美術文献は、専ら知識人によって書かれた美術論や美術家の伝記であり、聖堂を訪れた一般庶民がどのように、聖画像を評価したか、直接的に伝える記録はない。しかしながら、特にカラヴァッジオの作品については、庶民が大騒ぎしたと伝記作家バリオーネは伝えており、17世紀始めのローマに暮らす普通の人びとが聖画像を見てさまざまな感想を抱いたことは知られていた。「聖画像の新しい受容層＝庶民」の存在が画家たちにとっても無視できなくなったことは同時代の画家伝に覗える。例えばドメニキーノが1610年代に深く交流した人文主義知識人アグッキは、彼が残した絵画論断簡で、「美術通(Intendenti)」は理想美の表現をもとめるのに対して「庶民(Volgo)」はありのままの現実描写を喜び、と述べている。

(3) カラヴァッジオ絵画と庶民の関係は、17世紀ローマ美術研究者にはすでによく知られており、考察も進められていたのだが、バリオーネが言う「庶民(volgo)」が、具体的にどのような社会的地位の人びとを指すのか不明であり、当然ながらこうした人びとの美術受容を巡る議論は深まりようがなかった。この再検討が必要であると考えられた。

2. 研究の目的

以上のような予備的知見から本研究者は、次のような目的を立てた。

(1) 17世紀のローマ美術界における「美術通(Intendenti)」(画家や美術収集家、知識人たち)と「庶民(Volgo)」(一般大衆、巡礼等)の位置付けを、同時代の美術論や画家伝、宗教行事関係の文献などから多角的に検証する。主な考察対象となるのは、庶民も訪れる機会が多かったローマ市中の諸聖堂に1610年代から20年代に描かれた聖画像の制作と受容である。これによってカラヴァッジオやアンニーバレ・カラッチ没後の17世紀ローマ絵画研究に新たな視点を提供する。

(2) 17世紀初頭ローマの「聖画像」が「美術通」と「庶民」のそれぞれにどのように受け入れられたか、同時に画家たちは「美術通」と「庶民」を共に満足させるためにどのような配慮をして「聖画像」を制作したのか、様々な同時代資料を参照しながら、具体的に検証する。

3. 研究の方法

(1) 対抗宗教改革期のローマ教会は、同信会活動や慈善事業、教理教育、七大聖堂巡礼業、四十時間聖体礼拝業など庶民を巻き込む様々な宗教行事を行い体制の引き締めを計ったが、これは庶民の社会的存在感の増大につながっただけでなく、庶民にとって聖堂を飾る祭壇

画や壁画はかつてなく身近なものとなった。本研究代表者はこうした一般的状況に着目し、庶民も訪れる機会が多かったローマ市中の諸聖堂に1610年代から20年代に描かれた聖画像の制作と受容の有様を同時代の文献資料から解明することにした。

(2) 具体的には、本研究代表者は、16世紀半ばから17世紀にかけて、ローマで庶民を巻き込んで行われた様々宗教行事(七大聖堂巡礼行、四十時間聖体礼拝業など)の記録や同時代人の日記などを調査し、宗教美術と庶民および美術通の関わりがどう語られているか調査することとした。特に1575年、1600年、1625年の「大聖年」に関しては記録や同時代の証言も多く残されており、当初の調査の中核となった。

(3) これと平行して、当該時期の美術理論書や画家伝等の文献を「美術通」と「一般庶民」の区別という観点から読解すると共に、この時期に描かれた「聖画像」(ドメニキーノ作《聖ヒエロニムス最後の聖体拝領》、《聖セバステアヌスの殉教》など)を、「美術通」と「一般庶民」がそれぞれどのように「鑑賞したのか」、同時代の記録を参照しながら考察することとした。この作業によって17世紀のローマに生きる様々な社会階層の人々が聖画像を受容し評価した有様を総合的に解明することができると期待されたのである。

4. 研究成果

(1) 本研究の最も重要な目的は「17世紀初頭のローマにおける庶民の美術鑑賞の有様を具体的な事例に沿って解明する」ことであったが、これに関する成果物は、「老女の逸話」を再考した論文である。

「Vecchiarella(老女)の逸話」(以下、「老女の逸話」というのは、1646年に刊行された、アンニーバレ・カラッチの素描に基づく銅版画集『ボローニャ行商人尽し(Le arti a Bologna)』の序文に初出する。

逸話の要点は、アグッキから二つの絵画の優劣を尋ねられたアンニーバレが、その場に居合わせた老女の様子から、ドメニキーノが「感情をより生き生きと表現し、物語をわかりやすく描いて」おり、ガイド・レニに優っていると判断した、というものである。17世紀後半にレニやドメニキーノの伝記を書いた作家はいずれも、二人の絵画の特質を比較して論じ、絵画評価はどうあるべきか、という観点からこの逸話に言及している。現代の研究も同様に、「老女の逸話」を17世紀の美術理論、美術批評の興味深いエピソードの一つとして論じ、あるいは、「老女と絵画」「庶民と絵画」という古代以来の美術を巡るトポスの流れに位置づけようとしている。

17世紀においても現代においても、この逸話は絵画評価のあり方やドメニキーノとガイド・レニの絵画の特質の違いを考えさせる事例として取り上げられ、17世紀初頭のローマに生きる老女と美術との関係にはあまり注目されていない。この逸話に登場する老婆が実際に存在したか否かは重要とされないのである。しかしながら、近年進んだ、17世紀初頭のローマにおける庶民と美術との関わりを取り上げた社会史的な研究の成果を顧みると、この時期、庶民が聖堂を訪れて、描かれたキリスト教絵画を「鑑賞する」機会が多かったとわかる。アンニーバレの発言の切掛けとなった幼子を連れた老女が存在したことは十分に考えられるの

である。

本研究代表者は、こうした観点から 17 世紀初頭のローマ社会における美術と庶民の関わりを様々な側面から考察し、サン・タンドレア祈祷所をアンニーバレが訪れた時、孫娘を連れた老女が居合わせた可能性があることを指摘し、17 世紀初頭のローマに生きる庶民とキリスト教美術との関わりから「老女の逸話」を再検討した。

レナータ・アゴによれば、1656 年、ペスト流行後のローマで行われた住民調査ではローマに暮らす世帯 (famiglie) が「富裕 (ricche)」「安楽 (comode)」「貧しい (povere)」「悲惨 (miserabili)」の四つの層に区分されている。富裕層は人口の 2-3 パーセント、悲惨層が 5-6 パーセント、貧しい層が 64-65 パーセント、安楽層が 27-28 パーセントとされている。もちろん経済的に苦しい貴族もいるわけで、これらの区分は決して固定的なものではない。特徴的なのは安楽層と貧しい層が 90 パーセント以上を占める点である。

働いて稼いでいる人びと、店を構え営業している職人や、召使い、運送業者、担い売り、手伝いなどに加え、駆け出しの医者や法律家、司法書士、下級官吏なども貧しい層に含まれる。画家も同様である。貧しい層の人びとは病気、高齢化など何らかの理由で仕事ができなくなるとたちまち収入がなくなり「悲惨」な状態に陥落する可能性があるが、基本的には一定の収入があり自律的に生活できる人びとである。マンチーニが美術愛好家には「ほどほどの地位と財産の人 (quel di mediocre stato e fortuna)」も含まれると言う時、念頭においていたのは安楽層の人びとはもちろん、貧しい層にいても富裕層に仕える高い教養と相応の収入がある者や名の通った医者や法律家などだったと考えられるだろう。

17 世紀のローマでは、多くの聖堂で祝日に絵画が飾られ、幾つもの聖堂には新たに祭壇画や聖人伝が描かれており、聖母像や聖人像などは比較的貧しい人びとの家庭にも祀られていた。ローマに生きる庶民、とりわけ女性にとってキリスト教絵画は身近なものだったのであり、若い女の子 (孫娘?) を連れた老婆が聖堂や礼拝所で目撃される可能性は高かったのである。

リーグルは『ローマにおけるバロック美術の成立』で「老女の逸話」に言及し、この逸話はつまり「ドメニキーノは民衆が望むものを描き、民衆に語りかけたのに対してガイドは洗練された鑑賞者のために描いた」ということだと述べている。リーグルがこの逸話を知ったのはベッローリからだろうが、対抗宗教改革期のローマにおけるドメニキーノの画家としての立場をよく理解した発言であり、この逸話の本来の意義に適っているといえよう。この逸話にあるアンニーバレの発言はドメニキーノが、アルベルティの『絵画論』で語られるルネサンス以来の絵画の基本に適合しており、また 17 世紀初頭のキリスト教絵画に求められたデコルムを守っていることを指摘したものだ。しかし、アンニーバレ (パンテオンでラファエッロのとなりに埋葬された) 没後の権威もあり、17 世紀半ば以後の絵画議論で「老婆の逸話」は、本来のニュアンスを失い、アンニーバレがルドヴィーコに送ったガイド・レニとドメニキーノ比較論、さらには 17 世紀絵画のバロック的傾向と古典主義的傾向の比較論に取り込まれてしまったのである。

(2)本研究のもう一つの成果は、17世紀ローマの美術理論における新しい工夫と伝統的表現との関わりについて、同時代の詩論から考察したことである。このために、17世紀を代表する詩人ジャンバッティスタ・マリーノが1620年に出版した詩集『ザンポーニャ (Sampogna)』に添えた、ボローニャに住む友人アキリーニに宛てた書簡を取り上げた。

この書簡で特に興味深いのは、マリーノが他の作者の詩と自分の詩の関係について、「翻案」「模倣」「盗作」の3つを分けて説明していることである。17世紀初頭のローマでは画家たちの間でも「独創性」や「模倣」の問題がさまざまに論じられており、このマリーノの主張は、もちろん詩作に関するものだが、同時代の視覚芸術を論じたり考察したりするにも有益な視点を提供するものと期待された。

本研究代表者は、こうした観点からマリーノの詩作論の特質を分析した。

マリーノがアキリーニに宛てた手紙に挿入された「独創」と「模倣」の関係についての考察は、両者の関係が秩序立てて論じられており、当時の絵画界におけるオリジナルと模写の関係についての考え方に新たな観点を与えてくれる。マリーノは、他の著述家たちとの出会いは、偶然によるか人為によるか、の二通りであるというところから、「模倣」や「盗作」の問題を論じ始める。そして、人為的に他の著述家を参照するのには、翻案、模倣、盗作の三つのあり方があると論を進める。彼は「翻案」を「逐語的に翻訳することでなく、原作の基本的雰囲気壊すことなく、文章全体を解釈し大前提となっている状況を変えて、細部描写もそれに合わせて修正すること」だと説明する。

「模倣」についてマリーノは「アリストテレスが詩人の特質だとする、自然に倣って真実味があり、それ故に魅力的な物語を作り出すという意味での模倣ではなく、われわれに先立って著述をなした著名な巨匠たちの残した著作に従うやり方という意味での模倣」であると説明する。かれはさらに「この模倣は、一般的なものと個別的なものと二つあります。一般的な模倣とは、発想と扱われている事どもに関わるものです。個別的な模倣とは、分の言い回しや言葉に関わるものです。前者は叙事詩に、後者は叙情詩に、それぞれふさわしいものです。前者はより詩的で、より隠蔽しやすく、後者はずっと露骨であり褒められません」と述べている。前者の模倣は、「翻案」にもあったように「構想 (invenzione)」のレベルに留まるもので許されるのだが、後者は「配列 (disposizione)」にまで踏み込んでいるので「あまり褒められない」のである。

マリーノは自身が「模倣」したことも認めて次のように述べる。「個別の事象に関して、わたしが時として模倣したことを否定しません。しかし、わたしは、間違っているのでなければ、古くなった事象に新しい形式を与え、あるいは新しい事象に古い形式を添えるなど、いつも、古代の優れた詩人たち、当代の最も著名な詩人たちがなしたのと全く同じやり方で模倣してきたつもりです。わたしがこうした模倣にどれほど成功しているか否かは、わたしより知見のある人たちの判断に委ねたいとおもいます」。ここでマリーノは自分の模倣が「構想」の段階に留まり「配列」は独自のものであると主張している。

最後の「盗用 (rubbare)」についてマリーノは、「わたしが文学の研究を始めた最初の日か

ら、つねに盗みながら読書することを覚え、わたしにとって見事と思えることをわたしの役に立つように取り上げ、備忘録に抜き書きして、適切な時に利用してきたということです。これが本を学んで獲得する果実に他なりません」と述べている。これは抜き書きによる学習と言えるだろうが、その成果をそのまま自分のものとして公刊することには、独自の発想が全く認められず、それゆえに弾劾されるのである。実際、マリーノは、このような抜き書きに関して「こうした蓄えは各人が自分の興味に応じて作り上げるものであり、また求める時には簡単に素材を活用できるように秩序ある方法でまとめられています。人の知性も気質もきわめてさまざまであり、ある人の気に入ることも別の人には不快に思えるかも知れません。ある人が、ある作家の著作から選び出した文章も他の人からは無視されることもあるでしょう。古代彫刻や朽ち果てた大理石の断片も、適切な場所に素晴らしい技法で配されれば、新築された建物の彩りとなり、また威厳を添えることもあるでしょう」とする。仮に先行する作者の文章からそのまま抜き出した語句も、新しい文脈で用いられれば許容されるのだ。「盗用」であっても「翻案」や「模倣」と同様に、独創性が認められるかどうか判断の基準になっている。

以上のように、マリーノの模倣論を画家プッサンの絵画における独創論と対比しながら論ずることによって、17世紀ローマ美術界において、絵画論議がかつてないほど深化していたことが確認された。これはもちろん画家や絵画愛好家など知識人たちの議論だが、室内装飾としての絵画がローマ社会に浸透しつつあった状況を反映している事態と想定できた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕計3件

浦上 雅司 「ジュリオ・マンチーニ著『絵画省察』の特質と17世紀ローマ絵画界における位置」単著『福岡大学人文論叢』(査読無)第48巻第1号 pp.1-35 2017年

浦上 雅司 「ジョヴァン・バッティスタ・マリーノの詩的模倣論と17世紀ローマ絵画論」単著『福岡大学人文論叢』(査読無)第48巻第4号 pp.1-51 2017年

浦上 雅司 「「Vecchiarella(老女)の逸話」再考」単著『福岡大学人文論叢』(査読無)第49巻第3号 pp.1-36 2017年